「公正と正義を行え」　イザヤ書 56 章 1-12 節

2024.12.1

序論）立場が人を作る

「立場が人を作る」という考え方があります。これは人が特定の地位や役割に就くことで、その責任や期待に応じた行動や態度を取るようになり、結果としてその地位にふさわしい人物へと成長していくことです。

例えばビジネスの世界でも、今まで会社の愚痴ばかりを言っていた人が、責任ある立場に昇進したことにより、それまで以上にリーダーシップを発揮したり、組織全体を見渡す視点を持つようになったりしたということがあります。

また、子どもが嫌いだと言っていた人が、結婚して子どもが生まれたことによって、子供だけじゃなく、人の世話を良くするようになったという話しもあります。

このように立場というものは、その立場に相応しい振る舞いを私達に求めます。

それでは、神様に救われた私達に相応しい振る舞いとは何なのでしょうか。

今日の箇所で神様は、救われた者に求める行動として公正と正義を行えと言われています。【主】が求める公正と正義とはどのようなもので、私達は具体的二何をすればいいのか聖書から教えられていきたいと思います。

１）【主】が公正と正義を求める意味

今日の箇所は、１節に結論があります。１節を読んでみましょう。

56:1 【主】はこう言われる。「公正を守り、正義を行え。わたしの救いが来るのは近いからだ。わたしの義が現れるのも。」

神様は、「神様の救いと義が現れるのが近い」と語っておられます。
これは、神様の計画を宣言しているものです。
神様は、本来裁かれるはずの罪人を救い、その人を義とする計画をお持ちであり、それを実行しようとしておられます。そのため、この預言を聞く者に「公正と正義を行いなさい」と命じておられるのです。

注意すべき点は、この「公正と正義を行え」という命令が、神様の救いと義を受けるための条件として語られているのではないということです。むしろ、この命令は、既に神様が救いと義を用意しておられるから、その救いに相応しい者となるために、「公正と正義を行いなさい」と言われているのです。

【主】によって救われ、【主】の義を受け取る者は、その信仰のゆえに、公正と義

を実践していくのです。ある意味で、公正と義を実践することは、救い主なる【主】への信仰の現れだと言えます。

では、その「公正」と「義」とは何なのでしょうか。

① 公正について
言語的には、公正とは法廷における裁きや判決のことであり、裁判官である神様の前で正しい社会的正義を行うことを指しています。これは、単に罪を犯さないだけでなく、社会的弱者の権利を守ることも含まれています。

イザヤ書 1 章 17 節には次のように書かれています。
「善をなすことを習い、公正を求め、虐げる者を正し、みなしごを正しくさばき、やもめを弁護せよ。」

【主】は、不正に弱者を困らせる人を正し、みなしごや、やもめなどの権利を守り助けるような行動を公正としておられます。
神様のみ心にかなうように正しい社会を作り上げていく。それが、聖書がいう公正なのです。

② 義について
では義とはなんでしょうか。
義とは、単なる法的な正義を超えた、より広い意味で倫理的・道徳的、そして霊的な正しさを指します。
具体的には、神様との約束を忠実に守り、神様との関係を損なわないようにすることであり、神様が定められた秩序の中で正しい神様との関係築き、そして正しい人間関係を築くことを指します。
簡単に言えば、義とは神様に喜ばれるために、神様が正しいと認めておられる事を、心の中のあり方を含めて実践していくことです。

③ 公正と義の関係
では、1 節の「公正を守り、正義を行え」とはどうゆうことでしょうか。
それは私達の内面的にも、外面的にも神様のみ心を実行していくことです。
具体的には、聖書を通していつも【主】の御言葉を聞き、そのみことばの通りに神様を愛し、人を愛するように心を整えること。そして、それを実際的に社会生活の中で

実践していくことです。

心と体、そのすべてにおいて神様のみ心を実践していくこと。それが公正を守り、正義を行うということなのです。
その一つの具体例として聖書は 2 節のように語っています。

56:2 幸いなことよ。安息日を守って、これを汚さず、どんな悪事からもその手を守る人は。このように行う人、このことを堅く保つ人の子は。

神様は御心を実践する人を祝福してくださいます。そして、その祝福をうける幸いな人とは、具体的には安息日を守り、どんな悪事も行わない人のことなのです。

２）誰が救いを受けるのか

　では、具体的には、誰が、神様が計画されている救いを受け取ることができる人で、誰が【主】の救いを受け取れない人なのでしょうか。
　イスラエルの多くの人たちは、アブラハムの子孫である自分たちこそが、神様の約束の相続人であり、【主】に祝福されるべき民族であると思っていました。
　実際、申命記には以下のようなみことばがあります。

23:3 アンモン人とモアブ人は【主】の集会に加わってはならない。その十代目の子孫さえ、決して【主】の集会に加わることはできない。

23:1 睾丸のつぶれた者、陰茎を切り取られた者は【主】の集会に加わってはならない。

アンモン人、モアブ人というのは当時イスラエルと敵対していた民族ですね。
睾丸のつぶれた者、陰茎を切り取られた者というのは、ただ男性器を失った人ということではなくて、当時の偶像礼拝の文化の中に、祭司や信者を去勢して生殖能力をなくすような風習があったため、そのような偶像の文化に染まった人たちが、神の民として【主】の集会に加わらないよういわれたのが、23 章 1 節の命令です。

ところが、多くのイスラエル人はこれらの律法からアンモン人、モアブ人のような異邦人は【主】の集会に加わることはできないし、宦官という去勢されて生殖能力を失っている人達も、神の民になれないと考えていました。

ところが神様はそのようなイスラエル人の考えを打ち壊して3節のように言われています。

56:3 【主】に連なる異国の民は言ってはならない。「【主】はきっと、私をその民から切り離される」と。宦官も言ってはならない。「ああ、私は枯れ木だ」と。

多くのイスラエル人は異邦人や宦官は、神の民になれず、神様からの祝福を受けることができないと思っていた異邦人や宦官たちに対して、自分は「民から切り離される」「私は枯れ木だ」と言ってはならないと命じておられます。つまり、神様からの祝福を諦めてはいけないと言われているのです。

神様にとって異邦人も宦官も神様の救いが与えられる対象です。だから、神様は宦官や異邦人に対する約束を4節から7節で語られています。まずは4節、5節を読みましょう。

①宦官に対する約束

56:4 なぜなら、【主】がこう言われるからだ。「わたしの安息日を守り、わたしの喜ぶことを選び、わたしの契約を堅く保つ宦官たちには、
56:5 わたしの家、わたしの城壁の内で、息子、娘にもまさる記念の名を与え、絶えることのない永遠の名を与える。

安息日を守り、【主】が喜ぶことを選び、契約を保つというのは、【主】を信じ公正と義を行うことをさします。当時、イスラエル人なのに去勢されているがゆえに神様の恵みから切り離されていると宦官の中にも、【主】のみ心を忠実に実行していた人たちがいたのです。彼らのその生き方は神様にとって忠実な【主】の民のそのものの生き方であり、例え宦官であったとしても排除する理由にはなりませんでした。

だから、彼らには、【主】の家で、【主】の息子、娘にもまさる記念の名前が与えられるのです。【主】の家というのは、神の国のことです。そして、【主】の息子、娘というのはイスラエルの民たちのことです。

神様にとって人の評価は関係ないのです。聖書的には子どもを生むというのは、神様が人に委ねられた重大な使命ですが、例えその神様から与えられた使命を全うできない宦官であったとしても、【主】を信じて、【主】のみ心を実践しているのならば、【主】は神の国の民として特別な名前を与えてくださるのです。

②異邦人に対する約束
これは異邦人にも当てはまります。6-7 節を読みましょう。

56:6 また、【主】に連なって主に仕え、【主】の名を愛して、そのしもべとなった異国の民が、みな安息日を守ってこれを汚さず、わたしの契約を堅く保つなら、
56:7 わたしの聖なる山に来させて、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。彼らの全焼のささげ物やいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。なぜならわたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれるからだ。

6 節でいわれていることは、異邦人であったとしても【主】の民として公正と義を実践しようとする人のことですね。異邦人にも【主】を信じ【主】に従おうとする人がいました。そのような人は、【主】が、【主】の聖なる山に来させて、祈りの家で彼らを楽しませる。と言われています。
これも広い意味で理解していいでしょう。神様は異邦人であったとしても公正と義を実行する人に、神様の国で心から神様を礼拝し、神様に対してなんの隔たりもなく祈ることができ、【主】の恵みを十分に受けることができようにしてくださるのです。

なぜ、このように異邦人にも神の国の恵みが開かれているのでしょうか。
それは、【主】の家である神の国は、あらゆる民の祈りの家だからです。
【主】を信じて救われた者は、異邦人であったとしても自由に【主】に祈り、
【主】からの恵みを受けることができます。

新約聖書ローマ人への手紙にはこのように書かれています。
8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。

みなさん、【主】なる神様はイスラエル人でなかったとしても、信仰によって救われた者に、神様のことを「アバ、父」・・・日本語でいえば「お父ちゃん」とか「おやじ」と呼べる特権を与えてくださり、自由に祈って、神様により頼み、神様に楽しませていただける。そういう恵みを与えてくださるのです。
神様はそのために、イスラエルだけでなく、世界中の信仰者を呼び集めて、【主】の公同の教会をお建てになるのです。
イザヤ書にもどって 8 節を読みましょう。

56:8 ――イスラエルの散らされた者たちを集める方、【神】である主のことば――すでに集められた者たちに、わたしはさらに集めて加える。」

みなさん、これが神様の救いの計画なのです。
だから、この主を信じる者は公正と義を実践していくのです。
ただし、今日の箇所ではその公正と義の実践として、安息日を守ることが繰り返し強調されていることに注目しなければなりません。

安息日というと、基本的には金曜日の日が沈んだ時から土曜日の日が沈むまでのことを指します。ここで一つの疑問がわいてきます。
みなさん、私達は旧約聖書に定められている安息日に礼拝をするのではなく、今のように日曜日に礼拝をしていますが、私達は【主】が求めておられる公正と義を実践しているといえるのでしょうか？

答えは、私達は公正と義を実践していると言えます。
なぜならば、旧約聖書の律法による求めは、イエス・キリストによって既に成就しているからです。マタイの福音書には以下のような【主】のことばがあります。

マタイの福音書 5:17
わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思ってはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。

旧約聖書の律法はキリストによってすべて成就しています。
そして、コロサイ 2 章 16 節、17 節にはこのようにかかれています。

2:16 こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは祭りや新月や安息日のことで、だれかがあなたがたを批判することがあってはなりません。
2:17 これらは、来たるべきものの影であって、本体はキリストにあります。

旧約律法はキリストの影であって本体はキリストなのです。
みなさん、影と本体どちらが重要でしょうか。当然、本体ですよね。
その本体であるキリストは、安息日に弟子たちが収穫をすることをお許しになりましたし、病気の人を癒やされました。

だから、私達は旧約聖書に定められた安息日を文字通りの意味で守っていなくても大丈夫なのです。ただし、旧約律法がキリストの影であったとしても、そこに込められたスピリットは大切にするべきでしょう。
なぜなら、イエス様は安息日に【主】を礼拝することをやめておられなかったし、その【主】を信じた初代教会は、イエス様が復活された日曜日を【主】の日と定め、安息日と同じように週に一回、【主】を礼拝し続けました。

大切なのは、【主】と向き合い、【主】に祈り、【主】と交わりをする聖別された日をしっかりと持つということです。
神様も、「わたしの祈りの家で彼らを楽しませる」と言われましたが、【主】に祈り、【主】を礼拝し、【主】と交わることは本来楽しいことであり、私達が癒やされ、満たされ【主】の民として生きていくために、絶対必要な正しいことなのです。だから、【主】は安息日を守ることを繰り返し強調されました。
みなさん、だからこそ、みなさんが【主】を信じ、【主】の救いを受けているのならば、【主】を礼拝する日を必ず聖別して守っていきましょう。
このような時をもつことは、【主】に救われた者にとって絶対必要なことなのです。

3）【主】の民だと言いながら公正と義を行わなかったユダの指導者たち
　9 節から 12 節は、【主】を信じ公正と義を行っていた異邦人や宦官とは対照的に、【主】の民を委ねられながらも公正と義を行わなかったユダの指導者たちのことが書かれています。1 節ずつ簡単に解説をしながら読んでいきましょう。

56:9 野のすべての獣よ。やって来て貪り食うがよい。林の中のすべての獣も。

　野の獣というのは、ユダの敵対者であり、イザヤ時代でいうのならばバビロン帝国のことです。【主】は彼らに南ユダ王国を、貪り食う事を許可されています。
　なぜでしょうか。10 節

56:10 神の見張り人は目が見えず、みな何も知らない。彼らはみな口のきけない犬、ほえることもできない。あえいで、横になり、眠りを貪る。

見張り人、犬というのはユダの王様や指導者たちのことです。

彼らは、自分の民が【主】の前で公正と義を行っているかを見張り、間違った道を進もうとしているのならば声を挙げて注意する牧羊犬のような働きが求められていました。
ところが、当時の指導者たちは、人々が罪を行っていたとしてもそれを見ようともせず、さらにはその間違いを指摘する声をあげようともせずに、惰眠を貪る犬のように役割を果たしていなかったのです。
なぜならば、11 と 12 節

56:11-12 この犬どもは貪欲で、足ることを知らない。彼らは牧者なのに、悟ることがない。だれもがみな、自分勝手な道に向かって行く。一人残らず、自分の利得に。「やって来い。ぶどう酒を持って来るから、強い酒を浴びるほど飲もう。明日も今日と同じだろう。もっと、すばらしいかもしれない。」

赤字のセリフは当時の指導者たちのセリフでしょう。酔っ払いたちが現実逃避をして、自分たちの厳しい現実を直視せず、楽観的なことを言っているように、ユダの指導者たちも自分たちが犯している罪がどれほど神様の前で罪深く、自分たちがどれほど危機的な状況にいるのかを悟ることをせず、ただただ自分たちの利益だけを追い求めて自分勝手な歩みをしていたのです。

まさに彼らは、自分たちは【主】の民だといいながらも、実際には公正と義の神である【主】を信じることをせず、【主】の民にふさわしくない歩みをしていたのです。
だから、【主】、バビロンなどのイスラエルのすべての敵に対して、彼らを貪り食う許可を与えておられるのです。

ここに【主】の民から切り離されながらも【主】を信じ、公正と義を実行していた異邦人や宦官と、【主】の民だといいながら公正と義を実行しなかったユダの指導者たちの違いが現れています。

まとめ）
　みなさん、みなさんは皆さんを罪から救い、みなさんに義を与えてくださる【主】を信じておられるでしょうか。信じているのならば、【主】が言われる通りに公正と義を実践していきましょう。【主】は口だけの信仰ではなく、心の中だけの信仰でもなく、社会的にも個人的にも【主】と正しい関係を持つために義を実践

する民を求めておられます。
　口先や、心の中だけの信仰者ではなく、【主】を信じていることを公正と義を実行することで示していきましょう。

　特に今日の箇所では安息日を守ることが強調されていました。
　【主】イエスキリストによって律法が成就された時代に生きる私たちが、文字通りに安息日を守る必要はありません。でも、【主】は、私達が【主】に祈り、【主】に賛美のいけにえをささげ、【主】を礼拝するために一日を聖別することを求めておられるお方です。【主】と向き合うために一日を聖別するのは、救われた私たちにとって必要なことなのです。
　【主】は、「わたしの祈りの家で彼らを楽しませる」言ってくださるお方です。礼拝の日を聖別し、【主】と向き合う時を守っていきましょう。
　最後に１節をもう一度読んで終わりたいと思います。

56:1 【主】はこう言われる。「公正を守り、正義を行え。わたしの救いが来るのは近いからだ。わたしの義が現れるのも。」
　【主】は、【主】の救い、【主】の義を受ける者に「公正を守り、正義を行え」と言われるお方です。【主】を信じる者として、【主】の教えを実践していきたいと思います。